

高齢者の転倒、万病のもと

がん社会 を診る

中川 恵一

今年的大型連休も母は東大病院で過ごしました。急性胆のう炎から敗血症を発症したためです。

2年続けて連休期間に緊急入院したことになります。正月と並び医療スタッフが少ない時期ですから、タイミングとしてはよくありません。病気は時期を選んでくれませんから、仕方ありませんが。

以前からあった胆石が、胆のうから胆汁を送り出す「胆のう管」という管に詰まってしまいました。胆のうは胆汁

を出せなくなってパンパンにふくらみ、感染した細菌が血液の中に入り込んで全身に炎症が広がって、多臓器不全の状態となりました。

母は体の外から胆のうにチューブを入れて胆汁を外に流す治療を受けています。チューブから出てきた胆汁には多量の膿(うみ)が含まれていました。この治療は胆道がんや膵臓(すいぞう)がんでも胆道が詰まってしまった場合にも行います。

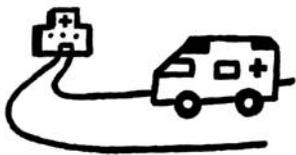


イラスト 中村 久美

89歳の母は長く一人暮らしを続けてきましたが、2023年4月の末に脚立から落ちたのをきっかけに、尿道から感染を起こして敗血症を発症しました。なんとか乗り越えたものの、足腰の衰えが激しく、要介護4となっています。

今回も4月27日の転倒の直後に胆のう炎を発症しました。転んだ拍子に胆石が胆のう管に落ちて、詰まったのかもしれません。

敗血症は高齢者を中心に増えており、国内の年間死亡数は10万人超。がんによる年間死亡は39万人弱ですから、その約4分の1に相当する重要な死因です。

敗血症が怖いのは、短時間に全身の臓器に致命的な損傷をあたえて、あっという間に命を奪うことが少なくないことです。

突然の死では、人生の整理

どころか、別れを惜しむこともできません。その点、がんは人生の終わりを確かめ合うだけの時間を与えてくれる病気です。「私はがんて死にたい」と、かねてから言っている理由です。

がんは一種の老化といえる病気ですから、年齢とともに増えていきます。一方で、がんが死因に占める割合は、男性は65〜69歳、女性は55〜59歳がピークで、この年代の死因の半分程度はがんによるものです。

この年代を過ぎると、がんで死亡する割合は低下していきます、敗血症の他、老衰や心臓病といったがん以外の病気で死亡する割合が高くなります。転倒が命に直結することはまれですから、死因統計には表れません。しかし、高齢者にとって転倒こそ「万病のもと」だといえます。

がんにも備えながら、転ばない筋力を保つことが百歳を迎えるためには必要です。

(東京大学特任教授)